



お輿入れ費用は約232億円!?

姫様の婚礼道具

有

馬家当主は、代々格式ある家柄の姫様を正室に迎えました。10代頼永には薩摩藩島津家の晴姫、11代頼成には徳川將軍家養女の精姫、14代頼寧には北白川宮家の貞子が輿入れしました。

名家から持参された婚礼道具の数々は、調度品から雑刀などの武具まで多種多様で、格式高く豪華につくられています。婚礼道具も様々ながら、姫様の人となりも様々。今回は、婚礼道具やゆかりの品にまつわるエピソードを通して、姫様の人物像に迫ります。

1 皇女から贈られた提重

久留米藩最後の藩主である11代頼成に輿入れした精姫は、1825年に有栖川宮韶仁親王の第4王女として生まれます。18歳の時、12代將軍徳川家慶の養女となり、1849年、頼成22歳、精姫25歳の時に婚儀の式が行なわれました。3人の子をもうけましたが皆幼い時に亡くなっています。和歌を得意とし、1913年、89歳で没しました。

精姫の輿入れには、現在の通貨で換算して、およそ232億円もの費用がかかったといえます。10代頼永のころから質素儉約に取り組んでいたため、この豪華絢爛な婚姻は藩内の反発を生む原因ともなりましたが、有馬家と徳川家は一層親密な関係を築くこととなります。



なしじからくさきくもんちら なぎなたこしらえ 梨地唐草菊紋散し雑刀拵 <<部分>> (有馬家所蔵)



くろうしぬりつづみ おうかもんまきえさげじゅう 黒漆塗鼓と桜花文時給提重 (有馬家所蔵)

家から養女として江戸に入る時には、里にたくさんの黄金が配られ、衣類や調度品まで全て徳川家が負担しました。途中、品川の宿で着物を着替え、髪も梳きなおして、京風を江戸風に改めていきます。付き添いの女房たちの衣服や調度も新しいものに取り替えられました。また、輿入れに合わせて、久留米藩上屋敷には精姫のための新御殿が作られ、精姫専用の門は、精姫が「御住居様」と呼ばれたため御住居御門と名づけられました。

精姫所用の品の中に、皇女和宮から贈られた提重があります。皇女和宮は仁孝天皇の皇女で孝明天皇の皇妹であり、14代將軍徳川家茂の正室として降嫁。婚約者であった有栖川宮熾仁親王は精姫の甥にあたり、2人は京都にいた頃から親交がありました。武家に嫁ぐという同じ境遇の中、通じ合うものがあつたのかもしれません。この提重は、蓋表に鼓、



葵紋が施された徳川家ゆかりの婚礼道具も伝来！歴代藩主だけじゃない！有馬家に輿入れした姫様たちの個性豊かなモノ語りを紹介します。

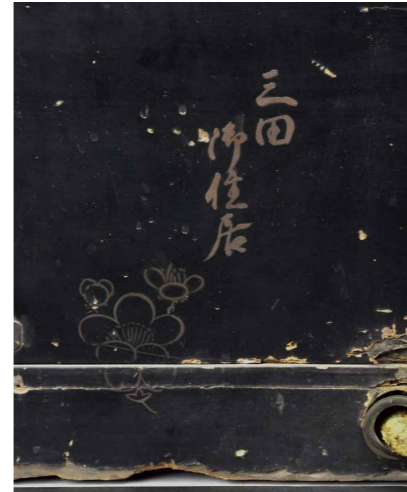


象牙人形《亀乗り》（有馬家所蔵）



象牙人形《小狗》（有馬家所蔵）

の没後も死ぬまで口にしませんでした。
有馬家には、雛人形をはじめとする極小の人形たちが伝来しています。そのうちの1つである象牙人形を、晴姫は夫の死後、部屋に飾っていたという可愛らしいエピソードも。



梅花三輪《精姫御印》が描かれた行器外箱（有馬家所蔵）

側面に桜花が蒔絵で表され、持ち手は閉じた扇を並べた形にデザインされています。外箱には、「和宮様より御戴」と書かれています。
その他にも精姫の所用品として、黒漆塗の文箱外箱やお菓子などを中に入れて運ぶ行器が伝わっています。が、いずれも梅花三輪（精姫御印）が描かれています。梨地唐草に菊紋散し、雑刀拵には、実家である有栖川宮家の菊紋と徳川家の葵紋があらわれています。

2 晴姫が愛でた象牙人形

精姫とは対照的に、質素儉約に取り組んだエピソードが残っているのが、久留米藩10代藩主有馬頼永に興入れた晴姫です。1820年、薩摩藩9代藩主島津齊宣の12女として、江戸の島津邸に生まれ、1837年、兄で10代藩主である斉興の養女となり、同年頼永と結婚。頼永は16歳、晴姫は18歳でした。頼永は1845年、晴姫を江戸に残し、藩主として久留米に初入封します。しかし翌年、晴姫と会うことなく享年25歳で没しました。晴姫は出家して晴雲院と号し、菩提を弔いました。



3 菊紋が施された人形

衆議院・貴族院議員、農林大臣を勤めた有馬家14代当主頼寧の夫人貞子は、北白川宮能久親王の第2王女として生まれました。1903年、頼寧が満18歳、貞子が満15歳の時に結婚。貞子は華族女学校（現学習院女子中高等科）に通っていましたが、結婚後中退しています。同年長男が誕生、三男四女（三女は生後11ヶ月で没）をもうけ、三男の頼義は直木賞作家として知られるようになります。有馬家には、菊花を2つ組み合わせさせた北白川宮家の紋が入ったお道具類や人形が伝わっており、これらは貞子が興入れの際に持参したものと考えられます。

貞子ゆかりの品である三つ折れ人形は、その名のとおり関節が折れ曲がり、座らせたり立たせたりすることができるといわれています。

晴姫が初めて久留米に入ったのは、頼永没後18年が経過した44歳の時でした。久留米では市ノ上（現久留米市合川町）の御殿で9年を過ごしています。学問はもちろんのこと、生花、茶道、押絵、琴、絵画、和歌といった諸芸に優れていたそうです。1903年に84歳で没しました。
行儀に厳粛で、煙草盆や膳などのゆがみを嫌い、「正しく配置せよ」と侍女にたびたび注意したという晴姫。体格は常に肥満で、目が大きく眉毛が濃く、歯並びは揃っており、髪は多く、いたって健康でした。頼永が大検令を發布すると、直ちに絹服を廃して綿服にし、金銀の装身具をやめて真鍮または竹木製のものを着用し、食事は一汁一菜にし、女中を減らすなど、質素儉約の模範を示しました。また、孝行心が厚く、舅である9代藩主頼徳が蜜柑の匂いを嫌ったため、晴姫も好物の蜜柑を断ち、頼徳



三つ折れ人形《女兒》（有馬家所蔵）



三つ折れ人形《男児》（有馬家所蔵）

を着ており、羽織には北白川宮家の菊紋が染め抜かれています。対になる女兒の人形もあり、紅地に菊模様の振袖に、北白川宮家の菊紋が金糸で刺繍されており、帯も菊模様という贅沢な品です。

2021年
2月6日(土) — 3月31日(水)

人形づくし
春づくし

主催 公益財団法人有馬記念館保存会

有馬記念館 午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日 毎週火曜日（祝祭日・連休中は除く）
休館日 有馬記念館之開館日
〒816-0001 福岡県北九州市久留米城跡内

有馬記念館
Arima Memorial Museum

2021年、幕府参勤が久留米城21万石の城主として、初めて久留米城に入ってから400年を迎えます。

有馬家の歴代藩主も個性豊かですが、輿入れした姫様の人柄もそれぞれ。そんな有馬家に伝来する人形や調度品を、有馬記念館で展示していました。今回紹介した精姫所用の黒漆塗鼓と桜花紋蒔絵提重や、貞子所用三つ折れ人形、晴姫が愛でた象牙人形など、大名家にふさわしい贅沢な品々を紹介しました。

今後も、有馬家ゆかりの資料を公開予定ですので、お楽しみに！

